
当院透析室における急変時対応トレーニング

富岡真奈、渡辺千春、小熊菜緒子、齋藤れい子、鈴木由美子、
能登谷恵利子、畠澤浩子、上野睦子、小野絵美、松岡淳子、
近江 薫、里吉清文*、宮形 滋*、原田 忠*
中通総合病院 血液浄化療法部、同 泌尿器科*

Staff training for sudden changes in dialysis patients' conditions in our facility

Mana Tomioka, Chiharu Watanabe, Naoko Oguma, Reiko Saito, Yumiko Suzuki
Eriko Notoya, Hiroko Hatazawa, Mutuko Ueno, Emi Ono, Junko Matuoka
Kaoru Oumi, Kiyofumi Satoyoshi*, Sigeru Miyagata*, Tadashi Harada*
Blood purification therapy part, Urology department*, Nakadori General Hospital

<諸語>

高齢・長期透析や心疾患合併患者の増加により、透析中の急変のリスクが高まっている。

当院透析室では、外来透析患者56名中、高齢者、長期透析患者が半数を占め、4割の患者が心疾患を合併している。新築移転後、ハイブリッドカテ室が出来たことから、心臓カテーテル検査、経皮的冠動脈形成術、弁置換術など、合併症治療目的の入院患者が増えた。また、スタッフにおいては新人や異動者が多く、透析経験年数3年未満が半数を占めており、透析中の急変対応に慣れていない。そこで、スタッフの急変に対する知識や技術、意識を調査し、トレーニング方法を検討、実践したため報告する。

<対象と方法>

対象：透析室全スタッフ24名（内訳：看護師11名、臨床工学技士11名 看護補助者1名 医療事務1名）

17名のスタッフが院内のBasic Life Support（以下BLS）、Immediate Cardiac Life Support（以下ICLS）を過去に受講している。看護師の半数が透析経験年数3年未満である。

方法：①学習会前にアンケートでスタッフの急変に対する知識や不安を把握

②日本救急医学会認定ICLSインストラクターによるBLSトレーニングと急変を想定したシミュレーションを平日の16時から17時、2日間で実施

③学習会後のアンケートでスタッフの変化を分析する

<結果>

これまでの取り組みとして、1年に1回急変時対応の学習会を行っていたが、学習会前のアンケートでは、「自信が持てない」と回答したスタッフが全体の8割と多い結果であった（図1）。手技においても「できる」と答えたスタッフは少なく、理由として「講習を受けてから時間がたっているため手技が曖昧」「夜間透析中に急変したら動けるか不安」などがあげられた（図2）。

アンケートの結果を受け看護補助者、医療事務も含め、スタッフ全員参加とした。全員が参加出来るよう業務調整した。以前はシミュレーションのみ行っていたが、BLSの手技に対する不安もあったことから、BLSの手技を重点においた学習と急変時対応シミュレーションの日を2日に分けて行った。

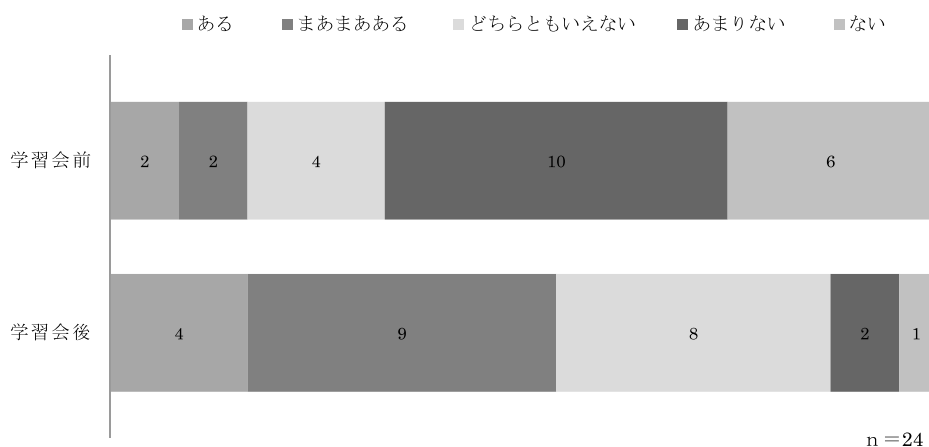


図1 急変対応に対する自信

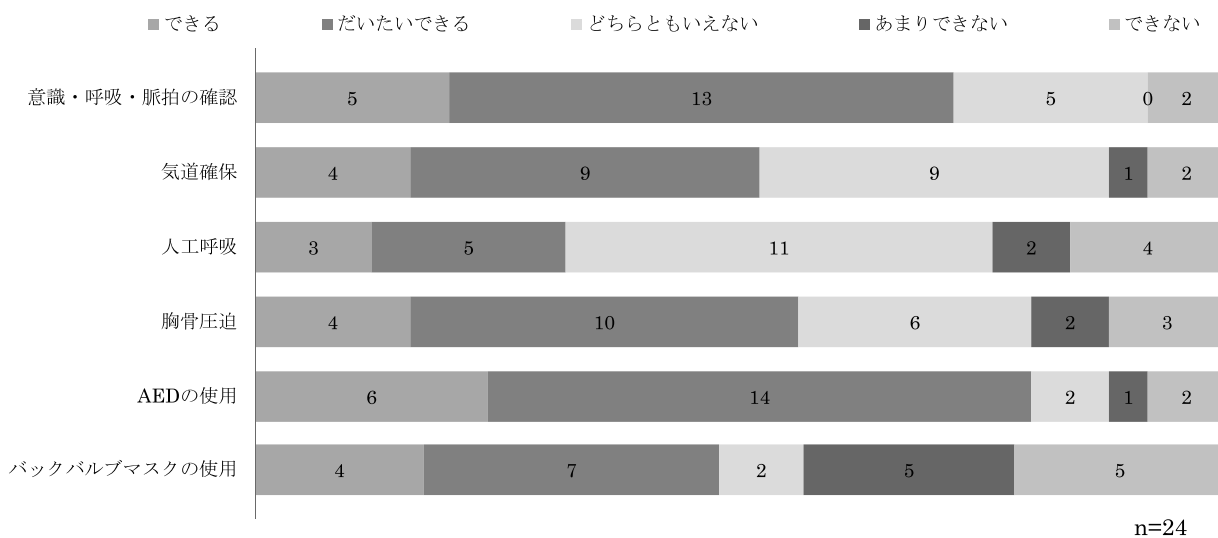


図2 学習会前アンケート（手技）

BLSトレーニングは、BLSの正しい知識、手技の習得を目的に行った。トレーニング人形2体、訓練用AEDを使用し、全員に2人1組で実技してもらった。講習未受講のスタッフは知識ほとんどなく、受講済みのスタッフも正しい手技ではなかった。根拠を説明しながら手技を指導し、ガイドライン2010、BLSマニュアルに沿った行動が出来るようになった（図4）。

急変時対応シミュレーションは、夜間透析中の心停止を想定した。夜間透析は、臨床工学技士1名、看護師2名で業務にあたっているため3人1組とした。①発見者は大声で応援を呼びBLSを開始する。②応援者1は救急カートやモニターなどの物品を準備し現場に向かう。③応援者2がフローシートに沿って主治医や救急部に連絡する。この役割を3人で分担し、医師が到着するまでの対応を少人数で実践できるようトレーニングした。全員が実技し、急変時の初期対応を確認、身につけることが出来た（図3）（図5）。

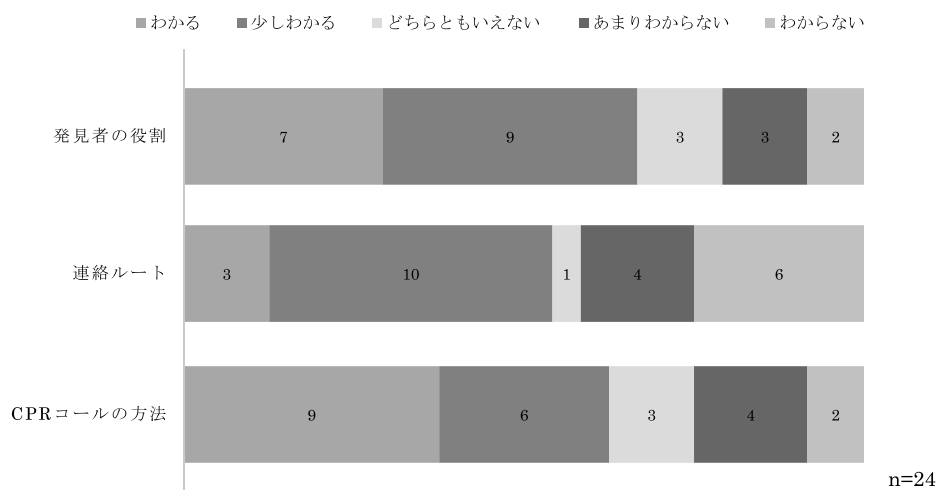


図3 学習会前アンケート（急変対応）

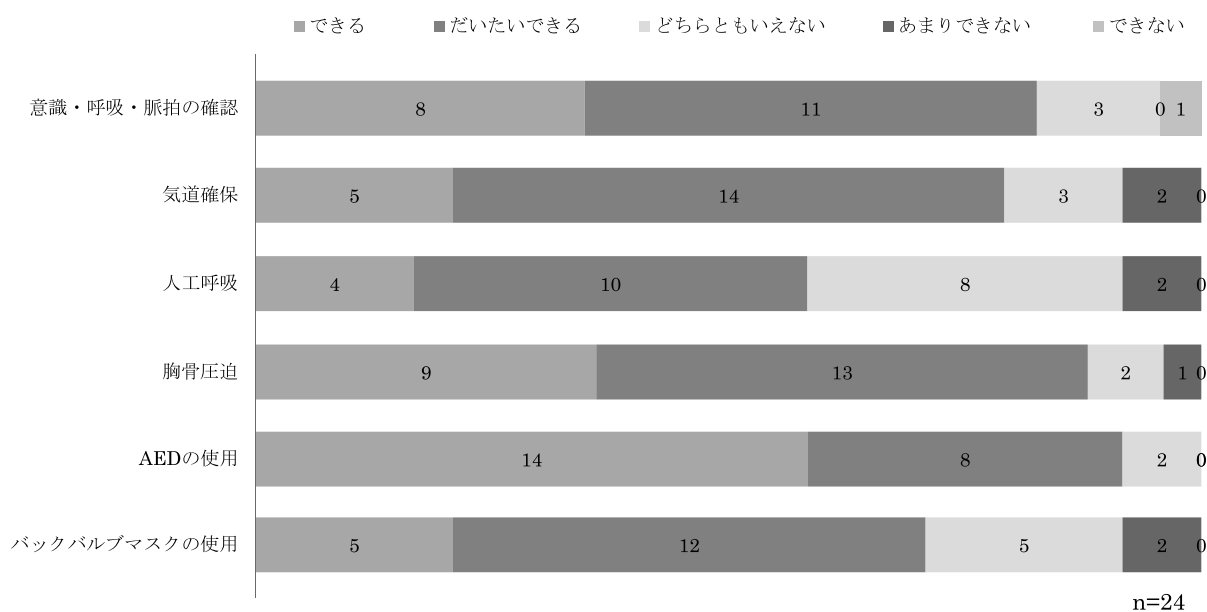


図4 学習会後アンケート（手技）

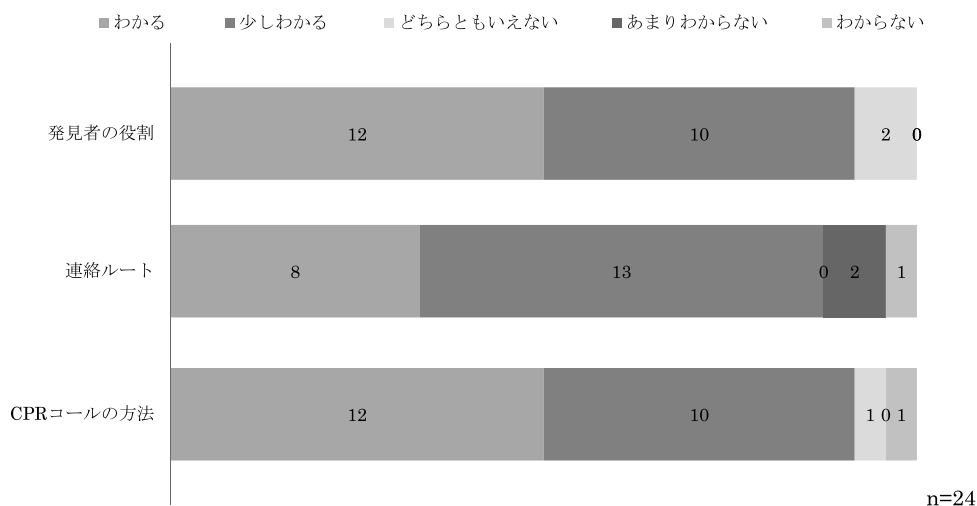


図5 学習会後アンケート（急変対応）

学習会後のアンケートでは、5割のスタッフが「自信がもてた」と回答した。「正しい手技を確認できた」「流れをイメージできた」との声が聞かれた。しかし、「フローシートを見ないと不安である」などの意見も聞かれた。

<考察>

急変発生時には迅速かつ適切に対処し、確実に治療へとつなげることが重要である¹⁾。急変のリスクが高くなってきている当院の現状では、透析中だけでなく待合室などでも急変は起こりうる。職種に関係なく、誰が発見しても、急変の初期対応をチームの一員として出来る必要があると考えた。看護補助者や医療事務にも参加してもらうことにより、透析室全スタッフが急変の初期対応に対する知識と技術を身につけることが出来たと考える。

透析中の急変をシミュレーションすることで経験の少ないスタッフも実際の急変をイメージする事が出来、スタッフの自信に繋がった。しかし、これまでも急変対応の学習会を年1回行っていても「自信がもてない」と8割のスタッフが回答したことから、学習会の頻度を上げていく必要がある。また、急変時に落ち着いて行動するために、今後は様々な場面を想定しトレーニングしていく必要があると考える。

今回の取り組みはスタッフの自信に繋がったが、急変時に迅速に動くためには繰り返しトレーニングする必要があると考える。

<結語>

BLSや様々な場面を想定したシミュレーションを検討し、継続していくことが今後の課題である。スタッフ全員が自信を持って対応できるようトレーニングを続け、急変に備えたい。

<引用・参考文献>

- 1) 関川美智：透析患者の急変初動のポイント、透析ケア vol.20 no.8：13、2014.